



別荘を改造したペット納骨堂



「宮」の正面にある「神卓」。上部に並んでいる神のうちの一人が童鼠にのりうつ

## トントンの死

早朝、トントンが死んだ。一三年間連れ添った愛犬の死は、私が台北でお世話になった居候先の陳おばさんをひどく悲しませた。涙で目を赤く腫らし、寝巻きのまま、私の寝ている部屋までトントンの死を知らせにきた。低予算で台北市の衛生局に引き取ってもらうか、ペットシヨップに頼んで火葬にしようか迷った。一家は、結局ペットシヨップの火葬を選んだ。トントンの遺骸を、タンポールに入れ、花を添え、近所のペットシヨップまで送り届けた。数日後に骨壺に入った遺骨となつて帰ってくるはずであった。

ところが、陳家の人びとは、何日経っても遺骨を引き取りに行こうとしない。遺骨を放つたらかしにされたペットシヨップがさぞかし困るだろうと思ひ、早く行くよう何度か促してみたが、ぐずぐずしている。よくよく聞いてみると、近所の「宮」という民間信仰寺院にいる霊媒師、「童鼠」の託宣が原因らしい。

童鼠によると、トントンの遺骨を手で運んではならないし、家に入れてもならないらしい。先日までの愛犬が、たかが童鼠の占いで不吉な存在になる。私は不快に感じた。

ペットシヨップに放置しておくわけにもいかない。私が引き取りに行くことを申し出たが、もち帰つても家にもち込むことはできない。どうしたものかと皆で頭をひねった。マンション一階の共同郵便受けの上にも置いておこうかという話さされたが、さすがにそうはいかない。結局、数日後、陳家の息子が引き取りに行った。家のなかにはもち込めないで、玄関に入つてす

ぐのベランダの隅に置いた。このあたりはある程度融通が利くようである。

## ペット専用の納骨堂へ

その週の日曜日、台北市から車で二時間ほどの山奥にある、ペット専用の納骨堂へと遺骨を運んだ。トントンの遺骨は、陳家の誰にも手にせず、結局私が運ぶことになった。遺骨を手にしたことへの恐怖を、私も彼らと共有しているはずだと、おばさんは考えているように私には見えた。

彼らはこれまでもしばしば、童鼠による神明の託宣に一喜一憂していた。商売がうまくいっていない息子の名前をどう変えるべきかと、誰かが病気が何が原因でどうすればよいかとか、童鼠の言葉で、陳家のおじさんの肺病がわかり、命拾いしたこともあるらしい。何かにつけて「迷信」に左右される居候先の人びとにいららしてはいた私は、たかが童鼠に左右される人間じゃないということを見せたくて、進んで骨壺を手にした。

私が遺骨を運ぶことが決まると、おばさんは事前に準備していた「紅包」とよばれる赤封筒を私に渡そうとした。紅包にはお金が含まれている。私にもたせた不浄な遺骨の代償を、金で償おうとする彼女の姿勢でも腹が立った。私は、そのとき冷静な人類学者ではなかった。「特に意味のない金なら要らない」と、突っぱねた。

さて、われわれがトントンの遺骨を納めに向かったペットの納骨堂は、バブル期に建てられ、九〇年代後半のバブル崩壊とともに使い捨てられた別荘である。別荘跡の地下を改装して、コインロッカーのような納骨棚を並べている。遺骨は一年間の保管で、五〇〇〇元(約二万八〇〇〇円)であった。納骨棚の正面には「神卓」があり、骨壺

## 犬は死んだら川に流し……

後におばさんから、トントンの遺骨をめぐる一連の出来事の話をつづり聞いた。宮の童鼠神明曰く動物の靈魂は「陰」の存在であり、「陽」の世界である人間界とは相容れない。よつて、「陰」であるトントンの遺骨を家のなかに入れることはできない。しかも、動物の靈魂は人間の靈魂よりも下等であるので、家にもち込むと何をすべきかわからないのだそうだ。また、女性は元来「陰」に属するので、女性と同じく「陰」である遺骨を手にするには、女性が同じく「陰」である「陽」に属する男性が運ぶのが望ましいかった。よつて、おばさんが運ぶことは好ましくなく、その場にいた男性の誰かが運ぶべきであった。

以前は、夏の暑い日、野良犬が涼を求めて、コンクリートのドアの前に寝転んでいた姿をよく目にしたが、台北市衛生局の政策により、今日台北市内ではそうした姿もめきり見られなくなった。それに反比例するように、ペットの納骨堂が各地にできていく。台湾では「犬は死んだら川に流し、猫は死んだら木に吊るす」と言つたものである。近所の木に猫の死体が吊るしてあり、怖い思いをしたという子どもたちの記憶を語りてくれた友人もいた。しかし、放浪する犬や猫は少なくない。死んだ犬や猫の扱ひ方も変わりつつある。こぎれいなペット葬産業の出現がそれを物語つていよう。近年はなかなか繁盛しているらしい。しかし一方で、わが居候先では、愛犬の死は「陰」であり、愛犬の靈魂は家族の一員の靈魂にはなり得ない。人間との間に明確な境界

が引かれている。一見、ペットは家族にどこまでも近づいているように見えるが、本当のところどこまで近づいたといえるのだろうか。



中国式の長い線香をもち、死んだペットのために「拝拝」する人たち。写真は仏式だが、それ以外の様式もある



「愛トントン」と書かれた骨壺

# 近くて遠い、人と犬の関係

木村 自

(きむら みずか)

国立民族学博物館研究機関研究員

見ごろ・  
食べごろ  
人類学